



ネイチャーなら

《わたしたちは大和の自然を愛します》

発行2018年8月1日

8月号・第199号

奈良・人と自然の会

会長 鈴木 末一



水路の改修（ベースキャンプ）

Contents

ホームページでは、**カラー**で見ることが出来ます



URL <http://www.naranature.com>

壮春力歩	1	7月・歴文研修会・報告	10
Monthly Repo.ならやま	2	山もり・てんこ森・報告	11
私のふるさと	3	ギャラリーならやま	12
里山の今	4・5・6	ならやまプロジェクト	13
やさしい病虫害講座	7	行事案内	14
字遊字感	8	幹事会報告 & 行事予告	15
春の感謝祭・報告	9		

壮春力歩

会長 鈴木 末一

1300年の時空を超えて

710年(和銅3年)、平城京に都が移された時、藤原不比等(ふじわらのふひと)が、邸宅を構えるにあたり、付近一帯を治めている土師氏から土地を譲り受けた際、土師氏ゆかりの寺院があり、取り壊さなかったので、邸宅の北東隅に残ることとなりました。それが僧玄昉(げんぼう)ゆかりの海龍王寺であり、大和名所図絵を調べますと、隅寺と記されています。

720年(養老4年)、藤原不比等が亡くなり、娘である光明皇后が邸宅を相続したので、邸宅は皇后が起居する皇后宮となり、北東隅の寺院は『光明皇后宮内寺院』となりました。

731年(天平3年)、遣唐留学僧として唐に渡っていた玄昉の帰国をひかえ、無事に帰国を果たし、最新の仏教・仏法を我が国に伝えることを願われた光明皇后は『皇后宮内寺院』の伽藍を整えられます。隅寺(海龍王寺)としての歴史は、ここから始まりました。光明皇后が自ら刻まれた十一面観音像をもとに、鎌倉時代に慶派(平安時代末期の仏師集団)の仏師により造立されました。

檜材で金泥が施され、条帛・天衣を掛け、裳・腰布をつけており、頭に天冠台・冠帯・左右垂飾、身は頸飾り・垂飾・瓔珞、手には臂釧・腕釧をつけています。衣の部分の彩色は朱・丹・緑青・群青など諸色の地に唐草・格子に十字などの諸文様を切金(きりがね)で表したもので、縁取りや区画の境界線に二重の切金線が多用されています。頭飾および装身具は精緻を極め、すべて銅製鍍金で透彫り(すかしぼり)を多用し、垂飾には諸色のガラス小玉と瓔珞片を綴ったものを用いています。像は精巧入念な作で、頭・体のプロポーション、頭部の自然な俯きに優しい手の動き、腰のひねりに巧みに応ずる右足の遊ばせ方など彫刻としての基本的なデッサンは確かなものがあり、衣の文様表現では彩色より切金が主座を占め、頭飾装身具では、透彫りの技巧の細かな点に注目できます。

奈良の町中にあるのに、まるで里山の中に佇ん

でいるかのような趣を感じることでできる野趣に富む寺院です。

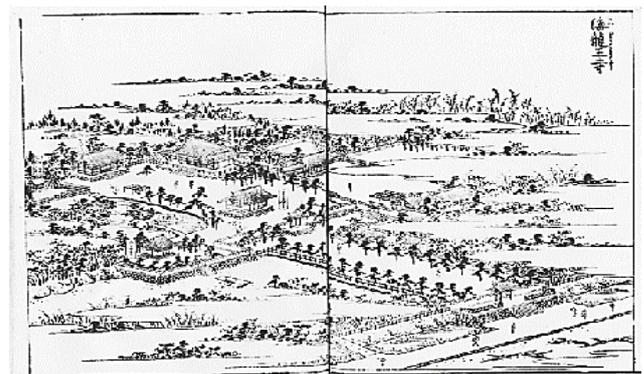
作家堀辰雄が、「大和路・信濃路」に次のように綴られています。

村の入口からちょっと右に外れると、そこに海龍王寺という小さな廃寺がある。その古い四脚門の陰にはいつ、思わずほっとしながら、うしろをふりかえってみると、いま自分の歩いてきたあたりを前景にして、大和平(やまとだいら)一帯が秋の収穫を前にして、いかにもふさふさと稲の穂波を打たせながら広がっている。僕はまぶしそうにそれへ目をやっていたが、それからふと自分の立っている古い門のいまにも崩れて来そうなの気づき、ああ、この明るい温かな平野が廃都の跡なのかと、いまさらのように考え出した。

このような雰囲気のある廃寺であった頃、堀辰雄は好んでこのお寺を訪れています。私も小学生の頃には、山門(東門)から東の方向つまり若草山の方を見渡すと、静かな広々とした田園地帯が目に入り込んできたものでした。しかし、現在は住宅が建ち並び、堀辰雄が愛でた風景とは別世界のように変貌しています。また、1950年頃までは無住寺であり、私たちにとっては格好の遊び場でもありました。しかし、1953年から徐々に伽藍整備が進められるようになり、半世紀以上経過した今日、国宝の五重小塔も安置され、ご住職のお人柄やご努力により、参拝者も多くなっています。

平城遷都1300年祭で、町のマップづくりに取り組む機会があり、私が生まれ育ち、生きてきた地元を目を向けるようになりました。

これが私の『大和の自然を愛します』の原点でもあります。



「海龍王寺伽藍」(画像検索)大和名所図絵巻之二

Monthly Repo. ならやま

八木 順一

6月21日(木) 活動 晴れ 81名+2名

震災後初の活動になったが、大きな被害を被った会員もなく、80名を超える参加者があった。またたくさん野菜が採れ、春の収穫祭を迎えた。朝



から準備や調理で大忙し。昼には会食が始まる。打ち合わせでは地震のお見舞いや本日の収穫祭の段取りの他、7月イベントなどの連絡が行われ

た。また、緑陰広場北の橋のかけ替えも里山Gの作業で無事終了した。里山Gはこの他、イベント工作の準備、エコGは収穫祭準備とナスの剪定、そして景観GはBC周辺の草刈りを行う。またビオ班は池やレンコン畑の除草、花班は花畑の施肥や草取り、そしてパトGは3コースのパトロールの他、秋グミの柵立てを行う。果樹班は今日でウメの収穫が終了。収量は合計180キロになった。

6月28日(木) 活動 曇り 75名+4名

暑い日が続く。熱中症への対策が大切になる。特にサプリメントの摂取や水分の補給などの他、清潔な水の確保(特に飲料水)についても強調される。気温が高い日が続くだろうこれからの活動日、安全に過ごしたいものだ。県から1名、近大生3名来訪。来週から夏時間が始まる。里山Gは水路の補修を中心に、エコGはジャガイモのマル



チ撤去、景観Gは佐保自然の森の草刈りに励む。その他、ビオ班は水生生物調査、花班は花畑の草取り、そしてパ

トGは1コースパトロールと観察路の笹刈り、また果樹班はブルーベリーの収穫を行う。

7月12日(木) 活動 晴れ 76名+5名

梅雨明けで暑い。しかし今日の活動を待っていたのか、たくさんの会員が集まる。会の存在感がそれだけ大きいということか。打ち合わせでは暑さ対策の喚起が再三再四行われる。暑さに向かって健康管理



はしっかりしたいものだ。入会希望者1名、近大生4名来訪。協働作業で

松茸林の周りの芽切り、根切りが行われる。里山Gは協働作業の他、水路補修。エコGは水田の除草とサトイモの除草・追肥、景観Gは協働作業で笹の根切りを実施。その他ビオ班は水生生物調査、花班は夏花畑の草取りと追肥、そしてパトGは3コースパトロールと山道の整備を行う。

7月19日(木) 活動 晴れ 77名+2名

猛烈な暑さになった。昨日は列島で40℃を超える場所もあったとか。それでも多くの会員が集まった。また、景観やエコのように8時から作業を始めるグループもあった。打ち合わせでは、暑さ対策の話が中心となったが、今週末に行われるイベントにつ



いても多くの連絡が行われる。シニア生2名。里山Gは枯死木処理や水路の補修、エコGは野菜の収穫の他、ぼかし肥料作り、そして景観GはBC付近の草刈りを行う。またビオ班は水生生物調査やイベント準備、花班は桜の下の草取りを中心に、またパトGはイベントの通路の草刈りや4コースのパトロールを行った。



私のふるさと

岡崎 節子

九州の大分県、別府湾に面して東に沿って行くとところに、私のふるさと、日出町（ひじまち）があります。この町に日出藩初代藩主木下延俊が築いた「日出城」（暘谷城）があります。石垣は細川忠興の家臣で築城の名手、穴生理右衛門によって築かれ「穴太積み」として有名です。



本丸下の海岸は俗に「城下海岸」と呼ばれ、海中に真清水が湧く一帯は「城下カレイ」の名で有名なマコガレイの棲息地になっています。

残念ながらこの城は明治7年に取り壊され、町内の仁王地区に鬼門櫓のみが残っています。

大正4年、馬上金山で巨額の富を築いた成清博愛は「暘谷城」三の丸跡の約3,670坪を購入し、別荘（的山荘てきざんそう）を建てました。別府湾を一望する広大な敷地に近代和風の豪華な日本



家屋、高崎山や別府湾を借景にした見事な日本庭園、この庭園越しに見る別府湾の景色は絶景です。

個室は皇族方の迎賓館として使用されました。皇族による記念植樹が8本もあります。



大広間には著名人の扁額や掛け軸・色紙など飾られており日本家屋の醍醐味が味わえ、国の重要文化財に指定されています。その後料亭として開業され、城下カレイの料亭として全国的に知られるようになりました。しかし維持管理が困難になり平成22年、日出町が施設を購入し、今は日本料理専門店「的山荘」としてオープンしています。

日出港から東に6キロほどの入り江に深江港があり、ここで私は潮風と共に育ちました。

魚市場に並ぶ鮮度の良い魚、貝類、仲買人、漁師さん、競り合う威勢のいい掛け声、季節の野菜、果物も並んでいました。



深江港は深くて大きな入り江で、平安時代から天然の良港として栄えました。寛文7年(1667)、日出藩木下俊長が風待ちや潮待ちの宿泊休憩施設、襟江亭を建てました。江戸時代には参勤交代の船がここから出港していました。日本で唯一現存する殿様の風待ち茶屋です。



私はこの石段で子どもの頃よく紙芝居を観ていました。

こんな穏やかな漁港ですが、深江地区には決して忘れてはならない戦争の過去があります。

昭和19年8月、海軍用地として買収済みだった日出町大神村の一部に「回天基地」が建設されたのです。人間魚雷「回天」が正式な兵器とされ、基地内に回天格納庫を含め舎屋51棟、魚雷調整場、変電所、浄水場施設などが整備されました。

「大神突撃隊」が編成され、285人が別府湾で命がけの訓練を行い、出撃予定者20名が選ばれました。8月3日8基の回天が愛媛県宿毛湾麦ヶ浦基地へ出航し、12日出撃待機命令を受けましたが、15日出撃することなく終戦を迎えました。しかし10日後の8月25日深夜、回天の搭乗員になった松尾秀輔少尉が、基地内で手榴弾を抱いて爆発させ自決されたのです。享年21歳でした。

子どもの頃、軍の施設はまだ残っていて、内部に大きなプールのような建物がありました（小舟も沈んでいました）。今から思えば魚雷調整場だったようです。軍の跡地は後世に伝えるため「回天記念公園」になり、回天の実物大模型が展示されています。また基地内にあった回天神社は、戦後住吉神社境内に移されました。その坂下に回天を格納してあった格納壕があり、壕の奥に2個の光る物体がありました。それが目玉のように見えて通るのが怖かった思い出があります。あれは何だったのか、いつの間にか無くなっていました。

時を重ねるごとに故郷は遠くなるばかりです。

里山グループ

杉山 耕二



エコファームグループ

田中 暉英

◆コバノミツバツツジ

(小葉の三葉躑躅)の挿し木 ―その3―

コバノミツバツツジの挿し木に取り組んで足かけ3年になる。昨年迄に挿したものは延べ60本、昨年の本欄で報告したように、その時点では5本活着していたが、現在ではわずかに1本だけという惨憺たる結果となった。もともとミツバツツジの挿し木は難しいといわれているが、これほどとは思わなかった。振り返ってみると、挿してから発根するまでは2~3週間程度なので、それまでに大半が葉が枯れ落ちてしまう。そこを乗り越えたと一応発根したとみて育苗に取り組むことになるが日常のケアがなかなか大変である。風通しの良い場所で水やり、遮光、霜よけなど四季を通じた世話をこまめにやったかというところと多々反省するところがあり、5本が1本になったゆえんであろう。

今年も4月初旬と6月中旬に60本程挿した。この原稿を書いている時点では、7本生き残っている。うち4本は、山班の青木さんのサジェクションで、当年枝を途中で切り分けた元部分を挿したものである。春挿し(前年枝)、梅雨挿し(当年枝)、さらにその元・先など挿し穂にも工夫を加えているがなかなか思うようにはなってくれない。

コバノミツバツツジは、本来実生で繁殖さすもののようなことから、昨秋に種を採取し3月から5月に掛けて3回に分けて播種した。しかし結果はいずれも発芽が見られなかった。今後さらに、種子の採取時期、保管方法、播種の時期など検討を加え今秋以降、再度挑戦したい。

以上のように、挿し木、実生など結果が思わしくないので奥の手として、某所で自然発芽した実生苗を掘り起し、鉢上げ・育苗している。

これらを組み合わせて、なんとしてでも苗木を育てたい。それを、ならやまの林縁部に植樹して春先にコバノミツバツツジの紅紫色の彩りを愛でながら躑躅(テキチョコク)したいと願っている。

◆伝統野菜

今エコファームでは夏野菜が最盛期。その中の紫とうがらしは大和の伝統野菜。毎年冬に作る大和まな、千筋みずな、最近では作らないが大和いも、ひもとうがらしもそうである。奈良、京都、大阪にはそれぞれ大和野菜、京野菜、なには野菜と呼ばれるその地域の伝統野菜がある。その土地で古くから作られてきた野菜で、自家採種を繰り返して命をつないできた(固定種)もので、その土地や風土に合ったものとして確立されたものをいう。しかし伝統野菜は流通経路から外れて廃れてきており、絶滅したものさえある。なぜ無くなったのかネットで調べた。自家採種の弱みは、耐病性に劣り、日持ちがしないし、その季節にしかとれない。また生育もバラバラでサイズをそろえて箱詰め輸送する広範囲の流通に向かなかつた。企画通りのサイズで大量生産に応えることができるF1種(一代雑種)が定着した。固定種、F1種の違いはなにかも調べてみた。固定種とは、親から子・子から孫へと代々同じ形質(味や形)が受け継がれている種で、昔から続く在来種はこのタイプ。F1種とは、異なる親を交配させることで、次に生まれた子(第一世代の種)は親とは異なる新たな形質を持ち、雄しべや葯が退化し、高い確率で花粉ができず自家受粉できにくい。できても一代目の特長が失われる。固定種の長所は、①F1種に比べ、発芽や生育のそろいが悪いが、それゆえ収穫期がずれるので長期にわたって収穫を楽しめる。②味にそれぞれ特長やクセのあるものが多く野菜本来の独特の味わいが楽しめる。③F1とは違い自家採種可能なので、種子を毎年買わずに済む。一方F1種のメリットは①発芽や生育のそろいが良いので市場に出荷しやすい。②耐病性品種など常に改良されているので特定の病気を避けやすい。③品種改良されているので、一般に味に癖がなく食べやすい。今日本の流通野菜と種子はほとんどがF1種である。しかし今、多様な味と持続可能性の点からも伝統野菜が再び見直されつつある。

景観グループ

西谷 範子

◆オオキンケイギク



5月から7月にかけて、この花を見なかった人はいないでしょう。ならやま通りにもたくさん咲いていました。

この花は北米原産のキク科の多年草です。草丈30~70cm、茎は束生し、黄色の花をつぎつぎと咲かせ種子で繁殖します。

もともと1880年代に観賞用、緑化用として導入され、国土交通省が緑化対象種に選定、道ののり面などに播種、その後野生化しました。

路傍、河川敷、線路際、海岸などに大群落をつくり、その強力な繁殖力から日本の在来種の植物を駆逐してしまい、また地域農業にも影響がでています。

2006年2月、国交省は特定外来種に指定。研究目的以外は栽培禁止となり、違反すると懲役3年以下か300万円以下の罰金になります。

防御の立場になった国交省もその繁殖力の強さに対応しきれず、頭を痛めています。

栽培禁止になった年に、奈良市でも生駒市でも職員がでてこれを引き抜いているのを見ましたが、1年ぐらい引いたところでその繁殖力は落ちず、今は日本中のあちこちに大群生を作っています。先日の歴文の吉備旅行の際、高速道路の両側に何キロにもわたってオオキンケイギクの真っ黄色の花が盛り上がり波打っているのを見ました。ならやまに入りこまないようにご協力ください。



里山の今

パトロールグループ

守口 京子

◆パトロールREPO

数年前から気になっていた場所がありました。赤岳から南へ下って左折したあたり、観察路の左側に平らな所があります。やぶさが茂っていますが、隙間からフキやミツバ、カンゾウらしきものが見えます。「野草園に出来るかも？でも遠いし」と思案していました。パトロール班のメンバーに提案してみると「やりましょう」という返事。去年ぐらいからちょっと刈ってはまた茂り、を繰り返していました。

今春パトロール班にも新メンバーが加わり機動力が増えました。ある日4人で行きました。草とさを刈ってみると、やはりカンゾウ！ちょうど食べごろです。(もちろん食べた。美味)さらにボケの木、シャガのような長い葉の草もあります。何の葉っぱ？シャガじゃないよ、ヒオウギスイセンだと一段落していたのですが・・・

7月に行ってみると、この草だけがたくましくささに負けずに直径2.5mくらいの群落に生い茂り、鮮やかな朱色の花をたくさん咲かせていました。どうやらフランス生まれの園芸種、ヒメヒオウギスイセンのようです。繁殖力が強く要注意、喜んでばかりはいられません。



ともあれ「赤岳野草園」とでも名付けましょうか。ちょっと昔を想像してみると、畑と花好きの働き者のおじさんがやって来て、人里離れた静かな畑を耕したり、花を愛でたり。夕方には晩御飯用の野草とお仏壇用のお花をうちに持って帰ったのかなあ。「おーい、お土産」

ならやま虫だより

菊川 年明

◆ケラ

ケラは昆虫界のモグラである。俗にオケラと呼ばれている。普段は畑などの土中にいて、植物の根、種子、小昆虫、ミミズなどを食べている。畑で土いじりをしていると現れることがある。少しおどけた顔で、捕まえても危害を加えない愛すべき昆虫である。

ケラはコオロギと近縁で、体長は約30mm、全身が褐色、ビロード状の短毛が体を覆っている。コオロギに近いとは言っても、体形はあまり似ていない。特徴的なのは前脚で、爪のあるシャベルのようになっており、穴掘り用に特化していて、モグラの手によく似ている。

地上へ出てもよく歩けるが、空中もよく飛び、水の上も上手に泳ぐ、器用な万能選手である。ただし、「ケラの水渡り」ということわざがあり、ケラは泳いでいても、途中で止めてしまうことが多いので、物事をやり遂げない人の喩えである。

俗に無一文のことを「おけら」ということがある。ケラを捕まえて首筋を持つと、頑丈な両手(前脚)を上げて、あたかもバンザイ=お手上げに見えるところからと言われているが、異説もある。

昆虫で鳴くのは、普通はオスであるが、ケラは例外で、オスほどではないがメスも鳴く。オスの鳴き声は「ジーー」とも「ビーー」とも聞こえる大きな連続音で、どこからともなく地中から聞こえてくる。「ミミズが鳴く」という俗信があるが、これはケラの声である。ずっと以前、福助足袋のCMソングの一節に「ゆうべ ミミズの鳴く声聞いた あれはケラだよ オケラだよ……」(サトウハチロー作詞) というのがあった。



ならやま花だより

桜木 晴代

◆ネジバナ

以前は真夏の野原や土手でよく見かけた花だが近年出会うことが少なくなったネジバナ。ならやまでも数年前に西の池のあたりで見たという人はいたが、その後見かけたという人はいない。ところが先日、国道下の土手で咲いていたよと教えてくれた人がいた。早速Bさんと見に行くとそここにピンクのかわいい花をつけたネジバナが咲いていた。思わずふたりの口をついて出たのが古今和歌集の「みちのくのしのぶもちずり誰ゆゑに乱れそめにし我ならなくに」であった。



ネジバナ

- *ラン科
- *ネジバナ属
- *多年草
- *別名ネジレバナ
モジズリ

- *日当たりの良い背の低い草地に生育
- *ねじれた花序が和名の由来
- *右巻きと左巻きがあり、比率はほぼ1対1
- *花は5弁がピンク・唇弁は白

山野草展の棚に必ずピンクのネジバナの鉢が並んでいる。愛好家にも人気の花である。改めて思わず口をついて出た歌の意味を調べてみた。

百人一首の中の有名な一首。河原左大臣 源融作。花がねじれていることから、身をよじるほどの恋心にとえた歌と解釈されるという。しかしこのもちずりは、陸奥の国信夫郡(現在の福島市内)の特産であった絹布にねじれるように染色した織物「信夫毛地摺」を指しているというのが時代的に考えても有力との説に遭遇したのだ。

万葉集の「柴付の 美宇良崎なる ねっこ草
あひ見ずあらば 吾恋ひめやも」作者不詳

このねっこ草(根都古草)こそがネジバナのようだ。大意は、会うことがなかったならば、私はこのように恋に苦しむことはなかつたらうに。

「信夫毛地摺」にも興味がわく結果になった。

やさしい病害虫講座 32

サツマイモの病害虫-1

木村 裕

[イモキバガ]

サツマイモの葉の一部が二つ折りにになっているのがよく見られます。これはイモキバガと言う小さな蛾のお子様が努力してこしらえたものです。

決して遊びでやったものではありません。ちゃんと生活がかかっています。

葉を開くと黒色で背中によく目立つ白い帯のあ



る細長い虫があわててとびだします。べっぴんさんでしよう？

二つ折りにした葉の内側は安全な住処すみかで悪い奴(鳥や蜂などの天敵)から身を守ってくれます。おまけに周囲の葉の壁は餌にもなっており、食と住が保証されています。お子様は腹が減ると、まわりの葉の壁をボリボリかじり齧りますので、葉の片面を食われた部分は褐色になって枯れます。成長につれ、つぎつぎに新しい住処へと移りかわりますので、捨て去った住居の葉は虫に食われた部分が穴になってボロボロに風化します。

サツマイモにごく普通に発生する虫で、少しく



らいなら無視しても問題はないでしょう。発生が多いと芋の肥大にも影響するかと思いますが、実態はよく分かっていません。

葉を開くと素早く逃げ去るので、取り逃がさないよう注意してください。また被害を受けた葉を

指で挟みこんで強く押さえるのも一つの防除法です。

[コガネムシ類]

丹精こめて栽培しお孫さんといっしょに掘り取ったイモの表面が浅く凹んで傷になっていることがよくあります。これはコガネムシさんのお子様がお先に頂戴したせいです。

コガネムシさんにはたくさんの親戚縁者がいますが、サツマイモにいたずらをするのはドウガネブイブイさん、アオドウガネさんが多いです。遠い親戚はカブトムシさんで、近い親戚はカナブンさんです。

子供さんの食べ物は、植物の根っこです。普段



はいろいろな野菜や花、雑草などの根をボリボリ齧っています。

そのため被害を受けた植物は根がなくなり、衰弱して枯れますが、被害が地面の中で徐々に進むため、犯人不明のまま処理されていることが多いです。

サツマイモの場合、イモの表面を浅く齧ります。イモの表面は見た目が悪くても中身は問題ありませんが、傷口から腐敗菌が侵入するので早く食べてしまうことです。

防除対策はありません。予防的にイモを植える



前に粒状の殺虫剤を畑の中に混ぜ込んでおく方法もありますが、

虫が卵を産む時期とずれるので期待するほどの効果はありません。予防的には成虫が誘引される有機物を畑にすきこまないことです。



杖代わり

岡田 安弘

自慢ではないが、人さまの世話になった事は数多くある。それが、人助けをする事になろうとは思っても寄らなかった。

両目の光を失った友人が、東京から京都に引越してきた。かつての職場の同僚で4つ年下。定年後、急速に視力が衰え、難病でいまだ治療法がない。しかも独り者。どんな暮らしをしているのか心配になり、一乗寺のマンションを訪問する。

食事、入浴、洗濯、掃除などで、なるだけヘルパーさんの手を借りないようにしていると言う。こまめに接待してくれる姿を前にして、「ほとんど自活」の言葉に納得。えらい！昔からの特徴ある笑い声を失っていないのもうれしい。

5年前まで東京の大学で非常勤講師をし、杖を頼りに京都から新幹線で通っていた。日常の市バスの乗り降りなどへっちゃら。京都シティーフィル合唱団に参加、ピアノとバイオリンの教室にも通う。行動派の彼に比べて私の日常は内にこもりがち。足腰は年々、衰えていく。これからの冬の時代をどう生きてゆこうか、そんなことを思う時の再会だった。

けなげな生き様に触発された。怠けてはおられないと、無精者にしては珍しく気合を入れて過ごすようになる。その時、思い出したのが、居合いを続ける先輩の事だ。

「地の力、天の力を吸い上げて丹田(臍下あたり)に集める。鞘の中に収まる刀こそ真の力という剣客の言葉を信じて精進している」と言っていた。忘れぬよう手帳に書き留めている。「ならやま」のボランティアに参加を決断したのも、そんなころだ。

私が杖代りを始めたのは、合唱コンサートに招待されてからだ。曲は耳で覚えることができる。ところが、見えない歌詞(ドイツ語)を全曲覚えるのは大変。その日、彼は仲間の肩に手をやり、舞台最前列に導かれた。私は彼のクチパクを見抜く。それを居酒屋でひやかした。「わからんところは当然、クチパクですよ」。こう打ち明けてケケケと笑う。

コンサートの後は必ず居酒屋に寄る。いつものように右手に杖、左手は私の肩。帰りはバス停まで送る。深夜、彼から電話。「居酒屋に上着を忘れた。ポケットに障害者手帳とICコードが入っている」と言う。2人とも屋号を覚えていない。「どの辺だったかなあ」。景色が見えない彼に、バカなことを尋ねた。「ごめんごめん。三条通と高瀬川が交差していた。行ってくるよ」と弁解する。

夜が明けるのを待つ。電車に乗る。慌てている。居酒屋が朝から開店しているわけではない。屋号と所在地、電話番号を確認して伝えた。夕刻、彼はヘルパーさんに導かれて店を訪問。しかし上着は無かった。

数日後、彼から報告の電話。合唱団の仲間とマンションの有志が手帳の再発行申請と盗難届けを済ませてくれたと知る。本来なら私の役目だ。「あんたはちっとも杖代りになっていない!」。ヘルパー一気取りを家内に一撃される。

彼は「健常者があんなもの盗んでどうするんだろうな。呑み直ししましょうや」と言い、ケケケと笑う。うなだれている私が癒されている。

祇園祭の宵山の日、女性ピアニストの演奏会に誘われた。お気に入りの女性らしい。「美人ですよ」。まるで目が見えるかのような口ぶりに吹き出す。雨予報にも関わらず、美人見たさに出かける。

案の定、にわか雨。若い女性の浴衣姿が河原町通に行く。「ぬれて肌がすけて見えるぞ」。私はまたもや失言。彼は「ふん」と鼻で笑い、私の肩に左手をおく。1本の傘に寄り添う。演奏時間が迫っている。速足になる。二人ともスーツはずぶぬれだ。

帰路の雨はいつそう激しかった。靴は水浸し。ずぶずぶと音をたてる。冷え切った体を居酒屋の熱燗で温めた。「君ひとりで傘をさす方がぬれなかっただろうな」と聞く。「先輩の肩を選んだのは自分です。急ぎ足のときは、あの体勢が安心なんです」。ここぞとばかりに、介護のイロハを語り出す。

彼が下車するバス停には格子状の鉄の溝ふたがある。下りた途端に杖の先が挟まったと、市の交通局に抗議し、バス停の位置をずらした実績の持ち主だ。浮世の義理も道半ばと悟る。

「ならやままほろばカレー」の饗宴
春の感謝祭開く

吉川 利文

平成30年の春の感謝祭は6月21日、梅雨空の合間を縫って催された。台風、大地震、大雨と、天変地異の直後だったが、参加者80人余。ふだんの活動日を上回る。

今年は天候が不順で、ならやまの農産物の作柄は全般にあまり芳しくない。しかし、感謝祭のメイン料理カレーライスの主役ジャガイモは、まずまずの出来。鈴木会長は冒頭のあいさつで、今年のジャガイモづくりの特徴を紹介した。ふつうは、種イモを適当に切り、切断面に木灰を塗って10センチくらいの深さの土に埋めるのだが、今年は、エコファームグループの萱野勉キャップの発案で、種イモの切断面に木灰を塗って畝の上にポンポンと置き、その上を、肥料を添えてマルチで覆うだけという独特の方式をとった。芽が出てマルチを押し上げると、そこに穴を開けて芽を伸ばしてやる。種イモを畝に転がしておくことから、俗にゴロゴロ方式と呼ばれるそうだが、ならやまでは初の試み。いわば「萱野方式」である。結果は、植え付けた男爵、メイクイン、キタアカリともかなりの収穫があった。

さて、いよいよカレー作り。ジャガイモを口に入る大きさに切り、タマネギ、ニンジンと同じサイズに刻んで鍋で炒め、そして煮る。

ここで、カレーライスといえばこの人、「エコファームのシェフ」こと小山喜与男さんの登場である。「コクのあるカレーづくり」がモットー。せっかくなので、そのレシピの一端をご紹介します。



まずうまみ用にスジ肉ブイヨン、ココナツミルク、赤ワイン、それに隠し味としてリーベリンウスターソースを投入、仕上げは、香辛料と辛み用としてガラムマサラ、ピンダルーペースト…

といった具合。念入りに調整しながら味付けしていた。

鈴木会長は開会宣言で、「萱野方式」のジャガイモを素材に、「小山方式」の「コク」で仕上げられたカレーライスを「言ってみれば『ならやままほろばカレー』とでも言いましょうか」と命名した。

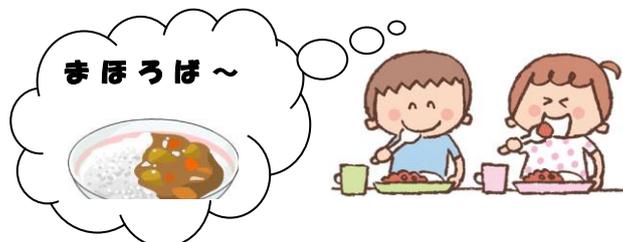
さて、男性軍の奮闘で、ご飯とカレーが約2時間半がかりで炊き上げられ、予定の正午きっかりにいよいよパーティー開始。皿を持った会員の列は、テントの前の「盛り付けデスク」に沿ってずらり。ご飯→カレー→トッピング類→サラダ類→定番のトッピング福神漬けやラッキョウ→おかず類の順で盛り付けしながら進む。トッピング類の主なものはナス、万願寺唐辛子、ズッキーニなどの素揚げ。また、サラダはサニーレタス、キャベツ、レッドオニオン、キュウリ、ラディッシュなど。ほとんどがならやまの産物だが、中には、調理を担当した女性会員らから差し入れの材料や料理もいくつか。



「盛り付けデスク」を通過した会員たちは自分の席に戻ってカレーライスをじっくり賞味。

かくして、豪華で華やかなカレーライスの饗宴がならやまの緑陰広場に繰り広げられ、「うまい」「うまい」の嘆声がそこここから上がった。

地味ながら、材料の収穫、調理や差し入れ料理に腕を振った女性軍の存在は欠かせない。カレー料理の全体を華やかにいどり、祭りを大いに盛り上げてくれた。担当したエコファームグループにとって、この『くの一』軍団にしっかり支えられながら、チームの一体感を実感。また、参加者にとっては、実りに感謝し合い、健康で「ならやまプロジェクト」に従事できる喜びを満喫した一日は、「カレー記念日」になるに違いない。



7月歴文研修会・報告 比叡山延暦寺を訪ねる

八木 順一

山上の涼しさを期待していたが、梅雨明けでむし暑い。しかし旅行日和になった。今回は「比叡山延暦寺を訪ねる」をメインテーマにし、最澄と南都仏教に焦点を当てての研修になった。

7月10日、27名の参加者。西大寺駅を出発後、京奈和道を走りながら、今日の日程の説明や代表のあいさつで研修がスタート。続いて今回の世話人から自己紹介や本日訪れる寺院の概要の説明などを聞く。そして、城陽ICへ。

ここからは24号線経由で宇治を経て宇治田原に至る。ここで、日本で最初に緑茶を作りだした中谷宗円の話や、徳川家康の伊賀越えに触れる。そのあと「禪定寺」へ。寺の由来などを聞いた後、茅葺の本堂・客殿を見学。さらに宝物殿では重文の素晴らしい木造十一面観音立像など12体の仏さまと対面。

時間がもっとあれば、という声も聞かれる。その後は猿丸神社を車から見学をし、



(禪定寺)

大津市坂本地区に。

車中では坂本の地形や歴史、そしてこれから訪れる生源寺と穴太衆の石積みについて話を聞く。その後滋賀院門跡の石積みを見学したり、生源寺では仏教の根源に関わる話を聞く機会を得た。易しく解き明かされた内容は特に印象に残り、仏教に対して十分納得がいくものとなる。

そしていよいよドライブウエーを通り、比叡山東塔へ。西大寺から延暦寺に至るまで車中では、何回にも分けて「仏教の始まりから日本伝来まで」「日本への仏教伝来と南都仏教」などについて説明が行われるが、最後に比叡山の上では「最澄の生涯とその思想」についても特に懇切丁寧な話がされる。

昼食後に根本中堂と大講堂へ足を向ける。

根本中堂は比叡山第一の総本堂だが、あいにく現在は改修工事中。しかしこのせいか、参拝者も少なくじっくり見学ができた。



また大講堂は

法華大会や經典

(滋賀院門跡)

の講義などに使われるお堂で、昭和31年の焼失後に坂本の参仏堂を移築したものとか。ここは代表的な座主の円珍や円仁の他に法然や親鸞などの木造の各宗祖師が安置されている場所である。

次に向かったのは西塔。ここでは浄土院と釈迦堂、そして、にない堂を訪れる。特に浄土院は最澄のご廟所になり、比叡山では一番清浄な聖域になる。56歳で入滅されたあと、この地に埋葬されたのである。また、にない堂は法華堂と常行堂という同じ形の二堂が廊下でつながっており、法華堂では座り続けて法華経を念じる堂座三昧が行われ、常行堂では、歩きながら阿弥陀経を念じる堂座三昧が行われるのである。

そして最後は、横川地域。ここでは横川中堂を見学する。横川中堂は円仁による開創だが、信長の焼き討ちや火災による焼失など数奇な運命をたどり昭和46年にやっと再建されたものだ。本堂の聖観世音菩薩は、度々の火災を免れた不思議な藤原時代の木造の仏像である。また今回は足を運べなかったが、ここにある元三大師堂は比叡山の内部派閥抗争で荒れ果てていた堂宇を立て直した良源(元三大師)を祀る。また彼は回峰行やおみくじの創始者といわれる。



(浄土院)

帰路は、西大津バイパス、名神高速道、そして第2京阪道、京奈和道を経て無事大和西大寺駅に到着。

**奈良県山の日・川の日
「山もり・てんこ森」イベント報告**

太田 和則

東北・関東の梅雨明け宣言に続き、やっと九州から北陸に向け、広いエリアで梅雨明けが発表されました。数日前からジ〜ジ〜ジ〜ジ〜と蝉の騒がしい鳴き声と、早朝から焼け付くような日差しとが一緒になり本格的な夏の到来です。

そんな中で海のない奈良県では「山の日・川の日」として“山もり・てんこ森”のイベントが開かれました。

- ・開催日：平成30年7月16日（月）
- ・会場：県立野外活動センター（都祁吐山町）



【開園を今や遅しと待ち受ける来場者】

奈良・人と自然の会は“大和の自然を未来に”のイベント趣旨に賛同し、今年も女性4名、男性8名の12名が参加。工作用として、竹のブンブンゴマと、のらくろストラップ（各100セット）を用意して子供たちを待ち受けました。



【竹のブンブンゴマ】



【のらくろストラップ】

今年のお客さま第1号は、仲良しのママ友の2家族総勢6名（女の子3名と男の子1名）。

おかげで順調な客足で会場は常に盛況状態でした。



【お客さま第1号】

子供たちの真剣な顔、楽しそうな顔、声を聞きながらたっぷりと元気を頂いたような気がします。2時頃には予定分を消化し成功裏に終了しました。



【会場は立すいの余地なし】

そのほか、他団体の会場も訪問しあって出品物の情報交換も盛んに行われておりました。

特に人の交流の輪が次々と広がっているように見受けられ、イベントの目的が達成されたのとは感じられました。



イベントのご準備をいただいた方々、スタッフとして参加いただいた方々ご苦労さまでした。



Gallery ならやま



▲梅の木ゴケ染め (シルクスカーフと綿シャツ)
小島 武雄



▲「人物デッサン」 有元 康人



▲写真「スズメの親子」 青木 幸子



▲クラフト「ギター弾き」 鈴木 末一



▲クラフト「恐竜」 田中 克彦

皆様からのご応募を
お待ちしております。
絵画・陶芸・写真・墨
絵・手芸作品・パッチ
ワーク・切り絵・自然
工作など

ならやまプロジェクト

明るく・楽しく・無理をせず

活動予定日

8月	2 (木) 9 (木) 23 (木) 30 (木)
9月	6 (木) 13 (木) 20 (木) 27 (木)

◆場所：奈良市佐紀町、奈良阪町、法蓮町、法華寺町にまたがる約 16 haの里山林地（県有林）

◆集合：現地ベースキャンプ地・午前9時

◆終了予定：午後1時（夏時間）

◆アクセス

- ① JR平城山駅下車：東口から南へ徒歩 10分
 - ② 近鉄奈良駅：バス 13 番乗り場 115 系統
8：28 発、高の原行き（平日）
 - ③ 近鉄高の原駅：バス 1 番乗り場 115 系統
8：36 発 JR 奈良駅西口行き（平日）
- ②③とも「佐保台西口」又は「平城大橋」下車
徒歩 7分

◆携行品など：弁当、飲み物、軍手（作業用具は現地で用意）



◆環境保護のため、お椀、箸、コップなどは各自ご持参ください。



◆連絡先：八木 順一

里山

8/2 協働作業

枯死木伐倒、枝処理／薪割り
水路の補修／イベントの準備

9 23

枯死木伐倒、枝処理／薪割り
水路の補修／イベント用漆の木伐採
イベントの準備

30 枯死木伐倒、枝処理／薪割り

水路の補修／イベントの片付け



景観

8/2 協働作業

整備：彩りの森の草刈り整備
ビオ池：池の整備

花：アジサイ剪定、茗荷採取、草引き

9 整備：実りの森草刈り整備

ビオ池：水生生物調査

花：アジサイ剪定、草引き

山野草園草引き、整備

23 整備：BC 周辺の草刈り整備

ビオ池：池の整備

花：葉牡丹種蒔き、山野草園草引き、整備

30 整備：彩りの森の草刈り整備

ビオ池：池の整備

花：矮性コスモス種まき、山野草園草引き、整備



エコファーム

8/2 協働作業

各種野菜の収穫／サツマイモの除草 つる返し

そば：そば畑、周辺の草刈り

果樹：ブルーベリー水やり、栗施肥

9 各種野菜畑除草、耕転

桜島大根、金時人参種まき／ネギ苗の植え付け

そば：畑楽施肥、土耕運畦作り

23 各種野菜畑除草、耕転

葉ボタン、ブロッコリー種まき／王将白菜種まき

そば：そば播種／協働作業

30 各種野菜畑除草、耕転／種まきの準備

果樹：梅の剪定



パトロール

8/2 協働作業

観察路の草刈り／ロープ手摺、丸太階段補修
水路の補修

9 観察路の草刈り／ロープ手摺、丸太階段補修 水路の補修

23 観察路の草刈り／水路の補修 イベントの準備／観察路表示板の補修

30 観察路の草刈り／水路の補修

行事案内 Part 1



公開イベント 行事案内

「夏だ！休みだ！里山で遊ぼう！②」

辻本 信一

奈良県下の子供たちとその家族に、夏休み期間中を利用して、里山の素晴らしさと自然環境保全の大切さを知ってもらおうと、林野庁交付金事業の対象となる教育・研修活動タイプの公開イベントとして、今年には既に7月21日に「夏だ！休みだ！里山で遊ぼう！①」を実施しました。

夏休み最後の思い出づくりとして、その第2弾「夏だ！休みだ！里山で遊ぼう！②」を、下記内容にて実施いたします。

1. 日 時：平成30年8月25日（土）
10:00~15:00（受付開始 09:30）
前日19時前のNHK天気予報で降水確率50%以上の場合、9月1日（土）に延期。
2. 場 所：ならやまベースキャンプ
3. 内 容：
10:00~10:30 オリエンテーション
10:30~13:00 飯盒炊さん、カレーを調理
13:00~14:45 里山での山遊びを通じ自然の大切さを学んでいただく。
14:45~15:00 振り返り
(天候その他の状況によっては、変更もございます。)
4. 参加費用：子供・保護者各自お一人500円
5. 募集人員：小学生40名及びその保護者
6. 申込方法：8月5日よりメールにて受付

受付担当：辻本信一

7. その他詳細は8月5日以降の当会HPをご参照下さい。

奈良県下から多くの参加者が見込まれますので、会員の皆さまには、7月のイベント同様、スタッフとして多数ご参加いただきますようお願いいたします。

8月自然教室・行事案内

「平城宮跡・燕の罫入り」

辻本 信一

8月20日（月）、毎年恒例となっている平城宮跡・大極殿西側ヨシ原周辺での「燕の罫（ねぐら）入り」観察会を実施いたします。

ただし、今年の夏は特に記録的な猛暑となっておりますので、日中の植物観察は割愛させていただき、集合時間も午後6時と例年の開始時間より1時間近く遅らせていただきます。

ちなみに、「燕の罫入り」観察会の時間帯そのものはこれまで通りで変わりございません。

渡り鳥の燕は、春になると東南アジア方面から日本に渡ってきて家の軒先などで巣を作り、子育てを行います。8月の終わり頃になると渡りの準備のためエサの豊富なヨシ原などに集まり、日本を去るまでの間、集団で過ごします。

この燕たちはたそがれ時になるとどこからともなく飛来し、空一面に群がり、その後次々にヨシ原などに舞い降ります。

その姿、そのスケールは圧巻で「燕の罫入り」と呼ばれています。

平城宮跡の「燕の罫入り」はヨシ原のすぐ近くで見ることができ、規模も大きく特に有名で約6万羽の燕が飛来するといわれています。

自然教室チームでは、昨年に引き続き、今年も下記要領にて「燕の罫入り」観察会を実施いたします。

1. 日 時：8月20日（月）18:00~19:30
2. 場 所：平城宮跡、大極殿西側ヨシ原周辺
3. 持ち物：暑さ対策グッズ、双眼鏡、ルーペ、飲物など
4. 中止の判断：当日午後3時に雨が降っている場合、またはその後雨が予想される場合は中止致します。

リピーターの方もたくさんいらっしゃいますが、これまで見たことないとおっしゃる方には、ぜひとも見ていただければと思います。

お友達もお誘いあわせのうえ、多数ご参加ください。皆さまのご参加お待ちしております。

